

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 466 号 平成 25 年 1 月 4 日

仕事始めに思う

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年中は私の駄文にお付き合い頂き、感謝しています。

今年も世の中の折々の出来事に目をやりながら、自分なりの思いをお伝えできればと思っておりますので、引き続き宜しくお願いいたします。

さて、1月4日は仕事始めの日です。今日は金曜日ですので、週明けが仕事始めという所もあると思いますが、私の職場のように、早速今日から本格始動というところも少なくない事でしょう。

年末年始のお休みといっても、始まってしまえば何をしたという訳でもないのに時はあっという間に過ぎ去ってしまい、こうしてまた1年が始まるのかと、毎年同じような感慨に耽っています。

さて昨年は、国内外に大きな課題を抱えながら日本国中が揺れ動いた、文字通り激動の1年だったと思います。今年がどのような年になるのか予測はつきませんが、少しでも明るい兆しが見える年になればと祈っています。

私は例年1月1日付けの新聞各紙を取り寄せ、それぞれの社説を読むのを習慣にしています。それは、それぞれの社説を通して、これからの社会のありよう等について考えるヒントが得られるからで、今年もまた、例年どおり、北海道新聞の他4紙を購入し読み比べてみました。

今年の各紙の社説は、主張している内容はそれぞれ異なっていますが、共通しているのは、日本というこの国がどういう国であるべきかといった「国の形」について言及している事でしょう。

各紙の社説について、表題を紹介しますと、

道新「政治に任せきりにすまい」

読売「政治の安定で国力を取り戻せ」

毎日「骨太の互惠精神育てよ」

朝日「『日本を考える』を考える」

日経「国力を高める一目標設定で『明るい明日』切り開こう」

というものでした。

昨年暮れの総選挙の結果、自民党は3年半ぶりに政権に返り咲きましたが、民主

党の政権運営の二の舞にならぬよう安全運転に徹しているように見えます。国民の間には、短命政権が続いてきた政治の混迷に終止符を打って、政局ではなく政策に力を入れて日本を立て直して欲しいと考えている方が多いと思いますが、今年の社説は、そうした国民の思いが色濃く反映されているとあって良いでしょう。

因みに昨年は、その前年東日本大震災により大きな被害を受けたことに加え、政治的にも混沌とした状態が続いていた事もあり、政治のガバナンス、リーダーシップを問うという色合いが強かったように感じています。いってみれば、決められない政治に対する国民の鬱積した不満や不安、そうしたものが各紙の社説に投影されていたであろう事は容易に想像できます。

とはいえ、安倍政権が背負っている荷物は非常に重たいものがあります。

被災地の復興対策はもとより金融緩和などの経済対策、TPPへの対応、尖閣列島をはじめとする領土問題など、国内外に山積する重要な諸課題に対して、安倍政権はどのような方針を示していくのか、日本国内だけでなく世界中が関心を持って見ている筈です。安倍総理には力強いリーダーシップを発揮され、新生日本の足固めをしていただくよう期待したいと思います。勿論、その為には、道新の社説も述べているように、国民が政治に任せきりにせず、一人ひとりが政治に関わっていく必要があると私も思います。

「自らやれる事は自らやる。」

自助であれ公助であれ、国民もまた自らの意識を大胆に変えていかなければ、新しい活力など生まれて来る筈もありません。

「今こそ示そう、日本の底力を」

東日本大震災後に、この言葉が飛び交いましたが、今こそ示すべきなのは、「国民の底力」なのではないでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）